

氏名	丸 尾 幸 喜
授与した学位	博 士
専攻分野の名称	医 学
学位授与番号	博乙第3810号
学位授与の日付	平成15年3月25日
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 (学位規則第4条第2項該当)
学位論文題目	ICAM-1 EXPRESSION AND THE SOLUBLE ICAM-1 LEVEL FOR EVALUATING THE METASTATIC POTENTIAL OF GASTRIC CANCER (胃癌転移能予測指標としての組織内ICAM-1発現と血中可溶性ICAM-1量)
論文審査委員	教授 白鳥 康史 教授 二宮 善文 教授 谷本 光音

学位論文内容の要旨

ICAM-1 はリンパ球の細胞障害や腫瘍浸潤における細胞細胞間および細胞間質間接着において重要な細胞接着因子のひとつである。

今回、胃癌の転移と組織内 ICAM-1 発現、血中可溶性 ICAM-1 量の関連につき検討した。

組織内 ICAM-1 発現は胃癌 108 症例中の 49%に見られ、発現は進行症例において高度であった。またリンパ節転移との関連では転移陰性で 46.9%に対し陽性では 56.1%であった。肝転移陽性症例では陰性症例に対し有意に高率で各々、90.9%、43.3%であった。一方、血中可溶性 ICAM-1 濃度は健常人で 262.1 ng/ml に対し、胃癌患者では有意に高く 391.5 ng / ml であった。特に、肝転移陽性患者の血中可溶性 ICAM-1 濃度は陰性患者より高値であり、さらに、組織内発現陽性症例の血中可溶性 ICAM-1 濃度は 408.9 ± 188.4 ng / ml と組織内発現陰性例の 308.1 ± 88.1 ng / ml に比べ有意に高値であった。

以上より、過剰発現した組織内 ICAM-1 は血中可溶性 ICAM-1 として放出され、リンパ球の抗腫瘍能を低下させ、血行性転移を生じさせるものと考えられた。

論文審査結果の要旨

本研究は、胃癌の転移と組織内 ICAM-1 発現、血中可溶性 ICAM-1 量の関連につき検討したものである、

組織内 ICAM-1 発現は胃癌 108 症例中の 49%に見られ、発現は進行症例において高度であった。またリンパ節転移との関連では転移陰性で 46.9%に対し陽性では 56.1%であった。肝転移陽性症例では、陰性症例に対し有意に高率で、各々 90.9%、43.4%であった。一方、血中可溶性 ICAM-1 濃度は健常人で 262.1ng/ml に対し、胃癌患者では有意に高く 391.5ng/ml であった。特に、肝転移陽性患者の血中可溶性 ICAM-1 濃度は院生患者より高値であり、更に、組織内発現陽性症例の血中可溶性 ICAM-1 濃度は 408.9 ± 188.4 ng/ml と組織内発現陰性例の 308.1 ± 88.1 ng/ml に比べ有意に高値であった。

以上より、胃癌では癌の転移に関連して組織内 ICAM-1 の過剰発現がみられ、血中可溶性 ICAM-1 として放出され、リンパ球の機能低下などにより血行性転移を促しているものと考えられる。

本研究は胃癌の治療を考える上で価値有る業績であり、よって、本研究者は博士(医学)の学位を得る資格があると認める。